〔その他〕私の授業メモ

英語授業におけるアクティブ・ラーニングの可能性
――ジグゾー法とリーディング活動

長谷川　正徳（東京都立上水高等学校）

1. はじめに

近年，教育現場では「アクティブ・ラーニング」という用語で児童・生徒の主体的な学びが求められている。この動きは十年に一度，改訂される学習指導要領においても重視される柱であることはいうまでもない。2015（平成27）年度「英語教育改善のための英語力調査事業（高等学校）」報告書によると，「聞いたり読んだりしたことに基づき，情報や考えなどについて，話し合ったり意見の交換をしたりする活動を行っているか」という内容ではそのような活動はあまりおこなわれていない。また，同報告書では改善への取り組みのポイントとして，リーディングに関してはまず，「まとまりのある英文をすばやく読んで，目的に応じて情報を探す」ようには指導されていないと指摘されている。そのような点も踏まえどのように授業に取り組むべきか，あるいは工夫することによって生徒の学びをよりよくするため，ジグゾー法によるリーディング活動に取り組んだ。

2. ジグゾー法実践の経緯：いま求められる力

学校教育では，知識や技能の獲得を目標に行われているが，その反面，表現力を伸ばしたり，言語活動，とりわけ聞き取った内容を書いたり伝えたりする力を十分に育ててきただろうか。将来に向けて，読んだことを書いて伝えたり，交渉する力を伸ばすことも学校教育で重要になる。そのような観点から，生徒同士が協力して一つの課題に取り組むことはできないか筆者は考えてきた。様々な教授法がすでにたくさん存在すると思われるが，授業の例としてジグゾー法による活動と英語の発表活動について触れたい。

3. 実践をふまえた考察

３．１．　グループ・ワークの実践

筆者は普段，高等学校で「コミュニケーションⅡ」や英語表現，英会話演習を授業でやっている。そのなかで，主体的，対話的な学びに挑戦し，実践している。その一例をここで述べる。情報を伝え合う活動の一例を以下でとりあげることとする。まず一つ目は，英語の長文や文章を読む教材の中で行った「ジグゾー法」による活動である。生徒の実態は習熟度の高くない標準クラスで，成績への関心や競争意識などはそれほど高くはない。その反面，勉強は得意とは言えないが性格は素直である。人数は24人程度である。二つ目にスピーチ活動を行った事例を紹介する。先の事例のクラスと違い，スピーチを行った英会話の授業は選択科目であり，英語の学習が好きで，さらに勉強をしたい生徒から構成されている。人数は，14名である。このように前者の例では英語の授業を退屈だと生徒は考え

る傾向があり，後者の例では，英語が好きだと感じている生徒が多いという違いがある。

（１）ジグゾー法

ジグゾー法は，学習者が協同して学習を進めていくやり方の一つである。表現力や思考力を伸ばすことを目的にする。ある学習集団をいくつかのグループに分け，そのグループの構成員で課題を分担し同じ課題を担当する生徒同士が学習し，それを最初のグループに持ち寄る学習である。筆者は，これを英語の授業に合わせ多少，変更しながら実践に取り組んだ。

（２）ジグゾー法の活動の説明

英語の授業において，４人で１グループの班をつくり，教室の隅に書いてある文章を読み，自分のシートのメモに要点を書く取り組みを行った。生徒は同時に座席から動き，読み取った内容をシートに書く。時間が終了したら，順番にプレゼンし，４つの英文の段落がどの順序か決めるという取り組みである。リーディングをする力と相手にわかりやすく説明する力，さらに未知の状況を推測する力を伸ばす活動である。

（３）英文

ア

Sleep is very important for memory. Getting enough sleep after studying helps you remember better. One survey found that you need at least six hours of sleep after studying if you want to remember well.

イ

Other research confirmed that you should study over several days rather than all in one day. You should get some sleep between study sessions. Even if the total study hours are the same, you can remember things better in this way.

ウ

There are two reasons why sleep is important for memory. First, sleep blocks out almost everything. There is no new information coming in. Second, the brain is working hard even while you are sleeping. It is sorting and storing what you studied.

エ

The trick to improving memory is simple: a combination of useful techniques, frequent review, and enough sleep. Can you remember that?

授業で読む英文が教科書にある場合，単元指導の中で，文章の大意をつかむ練習を行った。上記の四角で囲まれたものは文章を４段落にしたものである。筆者は，普段の授業では教科書を使用する場合，単元の指導計画で仮に10回の授業で一つの単元を終了するとき８回分を通常行われるような単語の暗記や文法説明，リスニング，音読などの活動に使っている。その上で，初見の文章を読むときには段落の正しい順序がわからない状況で，生徒が他の生徒と議論し，正しい順番を見つける訓練を行った。

高校生の３クラスで，上記の（ア），（イ），（ウ），（エ）を並べる活動である。どのクラスでも，（ア）→（ウ）→（イ）→（エ）と答えるグループが多い結果となった。しかし３クラスの中，１クラスの男子生徒が，多数意見に揺らぐことなく，「睡眠」についての文を正しく並べた。教室でのやり取りを要約すると，大多数の人は，①睡眠は記憶にとってよい→②それには２つの理由がある→③ほかの研究では，人は学習するとき１日にまとめるのではなく数日に分けたほうがいい→④記憶を改善するコツはテクニックと頻繁な復習と十分な睡眠のコンビネーション（組み合わせ）である，と考えた。上記の段落では，ア，ウ，イ，エの順になる。しかし，24人の生徒の中で，男子生徒１人だけが，自分は考えが違うと述べた。彼は次のように考えたのである。

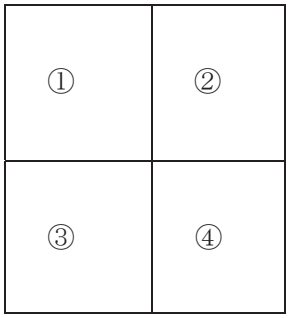
① 睡眠は記憶にとってよいもので，最低６時間必要だ→②他の研究でも学習は１日にまとめず数日かけたほうが記憶によい→③理由は２つある。First，Second→④記憶を改善するコツは３つの組み合わせである。

こうして少数意見の生徒も多数意見に流されることなく，しっかり意見を言うことができた。今後はより生活に根差した内容で生徒の主体性を伸ばしたいと考える。

図　英語の取り組み例

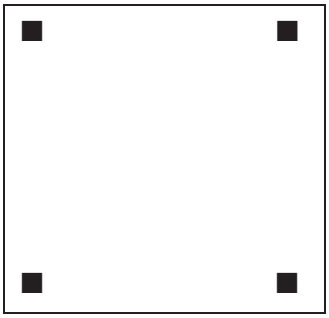
１　リーディング　　教室の４隅のコーナーに書いてある文章を読み，自分の座席にある紙にメモをする（５～６分）

グループ　４名（机と座席）



４名で１班

教室



紙に文章が書いてある。

→　メモを書く　→　各班で発表。

ルール：自分の席で書く。

コーナーと机を何度，往復してもよい。

２　シート

生徒の記入用紙

（４）考察

段落の順番を正しく並べる活動を行なった結果，次のことが分かった。第一に生徒は限られた情報から，仲間から教わった情報をもとに１つの答えを導くことができたことである。第二に，生徒は他の人の意見に同調しやすく，それに陥らないようにすることが大変であることである。教室という空間では，他の人と違う意見を言うことは勇気が必要で難しい課題である。そのため３クラス中，２クラスでは多数意見に流れ，同調する生徒も見られた。しかし，残り１クラスでは生徒同士の答えが違うものになり，停滞するなかで，他者の考えを聞くきっかけになった。留意点は，まず男子生徒の例のように２段落と３段落のつながりを正しくつかんだ生徒は少なく，生徒は「木を見て森を見ず」文脈をとることをやや苦手とする傾向がある。第二に意味を知らない英単語があると生徒はそれが過剰に気になってなかなか読めず，辞書で早く調べたいという気持ちになる。この観察に実践から，生徒の苦手とする項目を粘り強く指導し，繰り返すことで生徒の力は向上すると思われる。

（５）留意点

活動の中の留意点について以下で触れる。教育の分野では近年，アクティブ・ラーニングを意識して，話し合いや協働（協同）学習が望ましいと一般に思われている。その理由の一つには，互いに生徒同士が教えあいをすることが挙げられる。この点は筆者も理解できる。勉強のできなかった生徒が，勉強のできる生徒に教わることによって理解が深まるわけである。したがって教育効果があると考えられる。しかし，注意する点もある。学習が苦手な生徒がいつも教わる側になり，得意な生徒がいつも教える側になることである。勉強が苦手な子は協働作業の時に手を抜いて学習しなくても誰かが教えてくれるという受け身の姿勢になるおそれがある。一方，勉強の得意な子は話し合い活動で発言力が増す可能性がある。そうなるとグループや集団内で発言できる人が支配的となったり，生徒間で階層が生まれる可能性も否定はできない。筆者の授業ではまだそのようなヒエラルキーはなかったが留意すべき課題と考え，グループを作るときはメンバーが固定されないように工夫している。

３．２．スピーチによる発表活動

英語の学習において，発表という形で「話す」活動を行うことも生徒の主体性を伸ばすことにつながる。そこで，英会話の演習で取り組んだことを以下で触れる。具体的には生徒が人前で自分や身の回りのことで発表できるテーマを決め，発表発動をしてきた。例えば，自分の町の紹介，友人の紹介，クラブ活動などのテーマで，発表の準備を行ってきた。

こうしたスピーチに取り組んだ理由は，これまで英語の授業で習った技能が本当にできるようになったのだろうかという問題意識からだった。そこで，生徒が発表しやすい内容になることに留意しながら取り組んだ。

（１）発表活動を取り上げた理由

日頃，生徒と接していて与えられたものを学習することには慣れているが，自分の知識を活用し，外にアウトプットする機会が少ない傾向にあると感じている。この２例目の発表活動は，英語の学習に積極的であったり英語が好きであったりする生徒が履修する選択の授業である。発表には，書いた下書きをネイティブにチェックしてもらい，発表後も，他の生徒の質疑応答もした。単に発表のやりっ放しにならないように生徒がスピーチの各項目を評価し，シートに記したりして授業内でお互いを評価し合えるようにした。この英会話の活動では，１技能だけでなく，スピーチに至るまでに「書く」「話す」「聞く」活動を入れ，言語活動に取り組んだ。「書く」活動では添削のリライトを生徒は行い，スピーチによって「話す」活動を行い，発表者の話を聞く「リスニング」を行い，質疑では簡単な「やりとり」を行い英語の理解を深め，表現力を伸ばした。

（２）活動内容

普段の授業では自分の町の紹介，友人の紹介，クラブ活動などのテーマで，スピーチをする。発表に向け，自分で下書きを書く作業，外国人の先生から添削を受けること，練習の中で，アクセントやイントネーションの指導を受けるなどのプロセスを経て，発表をする。発表は「姿勢」,「声の大きさ」,「ジェスチャー」,「内容」などの各項目を評価する。このそれぞれの観点を合計する。教員の評価だけでなく，授業中は生徒も他の生徒の発表を聞き，点数をつける。他の生徒の発表を聞いて，批評し合いながらさらによい発表を心がけることになる。発表後，質疑やふりかえりの活動をおこない他の生徒の考えを聞くことによって生徒が視野を広げることにつながる。

（３）ふりかえりと相互評価

この活動を行って，発表活動をやりっ放しにしない取り組みとしてルーブリックによって発表をふりかえり，評価することも重要である。

以下の図においては，「流暢に話す」という観点，「発音，アクセント」,「意欲・態度」の観点,「適切さ」の４つの観点から評価する。記入例のように各項目を５点で評価し，20点満点で合計点を出す。取り組んだ結果，生徒たちはクラブ活動や日頃の茶道部のことや制服といった日常的なテーマについて発表し，互いに学び合った。また外国人の教員からもアドバイスを受けて学ぶ意欲も持つことができた。相手にわかりやすく表現する力を伸ばす活動である。

英会話の発表

	5 points	3 points	1 point
流暢さ	よどみなく滑らかに話している。	多少つかえるところはあるが概ね流暢に話している。	無言の時間が長く流暢に話していない。
発音・イントネーション	・強調する部分を強く言う ・英語らしい発音 ・メリハリ	・メリハリが少ない ・日本語まじりの発音で話している	・一本調子である。 ・メリハリがない。 ・発音が英語らしくない。
意欲・態度	・アイコンタクト ・相手に伝わるように効果的に話す。	アイコンタクトは少ないが，概ね相手に伝わるように話している。	・下を向いて話す。 ・独り言のように話す。
適切さ	ストーリーがわかりやすい。	流れがぎこちないが概ね１つのストーリーになっている。	ストーリーがわかりにくい。

５点　　３点　　１点で採点する。

ルーブリックの一例と記入例

Name	Fluency ／5	Intonation ／5	Attitude/Posture ／5	Appropriate ／5	Total ／20
Ａさん	4	4	5	5	18
Ｂさん	4	3	5	3	15

4. むすび

本稿では，英語の授業をどう工夫し，生徒の主体的な学びを引きだすかという点から実践報告した。この活動はあくまで一つの例であり，正解があるものでもないと考えている。今回の学習指導要領は高等学校の授業を大きく変えるヒントもある。学びに向かう力，主体的で，対話的で，深い学びは，子供にどう学ぶか，何ができるようになったかを迫るものである。このような知識基盤社会の中，将来は先行きが見えない予測困難な社会といわれるが子供たちが逞しく生きるために生きる力を育成することが私たち教師の使命である。

学習指導要領によると，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」に加え，児童・生徒を育成するにあたり，どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るかという「学びに向かう力，人間性等」の３つの項目が児童・生徒の育成をめざす柱とされている。そのなかで，主体的に学び，生徒同士が対話やディスカッションをとおして視野を広げ，「深い学び」へ結びつけることが教育分野で議論されている。本稿でふれたアクティブ・ラー

ニングの事例は一例にすぎず，本の中の序章である。こうした生徒の主体的な学びには問題解決学習や体験学習，実験やレポート，調査など各教科や学年によってさまざまであろう。本稿では，英語という分野に絞り，ジグゾー法による文章理解，スピーチの発表を紹介した。普段，退屈だと思われている英語の授業も変化の波にある。筆者は実践の中で，成功したときの嬉しさは忘れられないが，授業がうまくいかないときも実際にある。教員の道も「山あり谷あり」であるのかもしれない。そのような状況でも，あきらめることなく教師は生徒のために尽力し，生徒を励まし，成長を見守らなければならない。